

60号特集企画

文明の叡知に学び、想像力を解き放つ

世界文明センター



Center for the Study
of World Civilizations

21世紀は日本の若者にとって偉大な変革と達成の時代であるだろう。このような中、専門の研究にのみ没頭しては先の発展は望めない。学生には一つの知能としての想像力が求められる時代となったのだ。

世界文明センターは、人類がこれまで地上に生み出した数多くの文明の叡知に学び、創造の現場の最前線に立つ学生を育てるため設立された。

2006年春、東京工業大学に新たな学院が設立された。世界文明センター (Center for the Study of World Civilizations) である。このセンターは2006年秋から、文系科目のくくりの中でこれまで以上に多種多様な題材を用いた講義やワークショップを発信している。ここで発信されている講義は、これまでの文系科目や総合系科目とは異なる趣向が凝らされているために、今年度より文明科目という形での導入が決められている。

世界文明センターは芸術学院と人文学院の2つから構成されている。芸術学院では授業において学生が“実際に何かを創作する”ことに主眼をおいている。一方、人文学院の講義ではグローバルな視点から世界の文化（文明）、社会などについて広く扱っている。

このセンターの非常にユニークな点は、センターが予算の中で独自に外部から教員を募集しているという点だ。芸術学院はロジャー・パルバース先生、肥田野登先生、中嶋正之先生、人文学院は橋爪大三郎先生、井口時男先生、上田紀行先生がそれぞれ教員を集め、授業のプログラムを組んでいる。その中では、各界の著名な方々が特任教授として学生を指導したり、非常勤講師がそれぞれオリジナリティあふれた授業を提供している。そのため、授業の内容は非常にバラエティーに富んだものとなっている。芸術学院では、映像やパフォーマンスなどを題材とした授業を、人文学院では倫理観や思想をテーマとした講義を展開し、文系でありながらその枠だけにとらわれない授業プログラムが数多く含まれている。更に、このセンターが提供するものはこれだけに留まらない。月1回程度の頻度で、様々なテーマで開く研究会も予定されており、オブザーバーとして学生が参加できる。授業を履修する学生だけでなく、学内全体への文化の発信も行っているのだ。

この世界文明センターはどのような目的をもって出来たのだろうか。そしてセンターではどのような活動が行われているのだろうか。今回の取材では芸術学院、人文学院それぞれの責任者であるロジャー・パルバース先生と橋爪大三郎先生からのメッセージを伺った。





芸術学院担当
ロジャー・パルバース先生

人類の歴史において成されてきた様々な偉業は、須くそれを達成した人が持っていた想像力、そして創造力が大きな役割を果たした結果といえるだろう。学生の創造性を豊かにしたいということは、芸術学院、人文学院の共通の理念となっている。

芸術学院ではアクティブな活動を通して学生の創造性に刺激を与えている。芸術学院の授業の展開、そしてセンターが設立された目的は一体どのようなものであるのか。センター長であり芸術学院の責任者でもあるロジャー・パルバース先生にお話を伺った。

キーワードは imagination

センター設立の狙いはどこにあるのですか？

世界文明センターには2つの名前があります。1つは、今言っている通りの「世界文明センター」、そしてもう1つが英語で「CSWC」、"Center for the Study of World Civilizations"です。これは世界文明センターを英語で書いたものなのですが、単に英訳というわけではありません。どちらもこのセンターの名前なんです。注目して欲しいのは「文明」です。CSWCではCivilizations、と「s」がついていますよね？文明は日本語だとあまり複数形を使いませんが、この題に「s」がついているとおり世界にはたくさんの文明があるんです。1つの中心文明があるだけでなく、東アジアの文明、アフリカ、南米、中東などね。世界には様々な文明があって、素晴らしいアイデア、考え方や文化が世界にはあるわけですから、明治維新以降日本が積極的にとり入れてきた欧米の文化だけではなく他のものも感じられるようにというのが狙いの1つです。

さらにセンターにはもう一つの狙いがあります。それは他の文化を知ることによって日本の文化を知ってもらいたいということです。そのための活動の一つとして、7月5日に「大岡山鉄道の夜」という宮沢賢治のイベントを行う予定です。女優のふるたこうこさんと私がそれぞれ日本語、英語で賢治の詩を朗読し、それから演奏会があるんです。演奏会ではカメルーン出身のシンガーソングライターのワッシーさんが宮沢賢治の詩に基づいて作った曲が演奏されます。



それによって学生に伝えた
ものとは何ですか？

この大学の学生はほとんどが理科系ですから、今までの日本人の科学者の持っていた、この道一筋的な見方を持っていると思うんですよ。とにかく一生懸命勤勉にこれだけをがんばっていれば出世とか立派なエンジニアになれるというような。その時代はもう終わっているんです。“Nothing great is ever achieved without imagination”これがキーワードですね。学生たちにイマジネーションを抱きしめてほしいんです。つまり自分の研究に対しても、文化的な勉強に対しても、自分の潜在的な意識というかイマジネーションを活かして表現する。表現する媒体は言葉に限らず、ビジュアル的な方法もあるし、身体を用いた方法もあります。そういうことによってイマジネーションが開放されるんですよ。そして、こうした自分の研究に一切関係のないように見えることであっても、必ず関係があるはずなんですよ。必ずどこかでいつかクロスロードがあって、自分の中でその二つの線が交わると思います。それは大学を出てからかもしれませんがあると思います。

講義の内容はどのようなもの
があるのでしょうか？

かなりバラエティーに富んだプログラムになっていると思います。演劇、彫刻から思想、歴史、社会学、映像、パフォーマンス、翻訳、クリエイティブライティング。できるだけ広く展開したいと思っています。映画に関するレクチャーもありますし。4月17日には建築家の伊東豊雄さんに来ていただきレクチャーをしていただくことにもなっています。



好きこそものの上手なれ

センターを通して学生に伝
えたいものは何ですか？

楽しいこと、自分の趣味と自分の好み、英語で言うpreferenceですね。それと知識との繋がりは非常に大切です。まず勉強して、好きなことについて誰よりもよく知ることです。好きなことと一番よく知っていることの融合ができればすごいです。

例えば、私はよく学生たちに英語をマスターするコツを聞かれます。そういう時に、あなたの趣味は何ですかって聞くんです。そして、テニスが好きだったとしたらアメリカのテニス雑誌を定期購読してくださいって言うんです。新聞を読まなくてもテニスの雑誌を読めばいいんです。そうすると張り切って読むから吸収力が違うんです。

人生で好きなことができれば人生は失敗なんですよ。親と先生の言いなりにならないで自分の道は自分で決める。これは何よりも大切です。これをしない人は後悔するだけ。もちろん人のアドバイスを聞くなってことじゃないですよ。全部聞いた上で、自分でどう料理するかを考えればいいんです。それが大人ということです。英語を習うために大学に来ている訳じゃないんです。自分を理解するためにですよ。自分の才能はどこにあるのかということを発見するためです。英語で言うとself knowledgeといますが、自分を知ることです。知った上で何ができるか。できることとできないことを早く決めることです。そしてできないことはやらない。

それは先を見る力をつける
ということですか？

そうです。今の若い人は、儲かればいい、と六本木でフェラーリに乗っているような人をヒーローと思っている人が少なくないと思います。確かに金持ちになることはいいことです。私も金持ちになりたい。だけど、貧しい人たちに寄付したり、社会に対していいことをする習慣もとても大事ですね。

昭和20年代にはSONYの森田さん、本田技研の本田さん、パナソニックの松下さんなどすばらしく天才的、文化的な方々が戦後の日本を築いたわけです。この人たちも金持ちになり素晴らしい会社を築いたわけですが、決して儲かるためだけが目的ではなかった。日本の生活水準とかライフスタイルの向上を目指して仕事していたと思うんです。今はどうでしょうか？ 21世紀に日本がどういう国になればいいか、ということを考えている若い人は決して多くはないと思うんです。もちろん自分のことで精一杯になってしまっているというのは百も承知ですよ。ただモデルが無い。日本の将来を考えて正しい方向に行こうとする人がいったいどこにいるだろうか。このセンターではささやかだけれどこのようなところも変えていきたいと思っています。

芸術学院が発信すること

芸術学院では具体的に何を
やっているんですか？

ワークショップを通して、様々な文明を伝えています。アフリカ、アジア、そして秋にはアイルランドの文明を対象に考えています。世界にあるいろいろな文明を知って欲しいんですよ。例えば、アイルランドはイギリスの傍にありますね。でもその文明はイギリスと一緒にではないんです。アイルランドはケルトの文化なんですよ。でもそれを知っている学生はどれくらいいるのでしょうか？ こういうことに少しずつ触れていってもらって、今までに出会ったことのない文明に出会って欲しいんです。そして、それによって視野を広げてもらいたいと思います。

ワークショップとはどうい
う授業なのですか？

ワークショップは講義と違って聞いて学ぶのではなく、「やる」・「する」ことを対象とした授業です。芸術であろうと演劇であろうと、彫刻であろうとやらないとダメ、作らないとダメなんですね。こういう彫刻があったらすごい、と頭で考えられても、手で作れないと。芸術っていうのは作るものなんです。作るためには実際にやってみる事が一番です。そのためにワークショップが絶対必要だと思うんですよ。自分のすべての感情、喜怒哀楽を活かして、自分の身体で歩いて、叫んで、書く。たとえば今回はイギリスから二人の野外パフォーマーに来てもらいました。世界的に有名な人たちで、ワークショップを担当してもらいました。まず二人が学生にパフォーマンスの基礎的な動きや演技をするんです。そして学生はそれを肌で感じとり、自分の中に浸透させていくわけです。そして最後に自分自身でもパフォーマンスをやってみるという内容です。このワークショップは学生にとって非日常の、貴重な表現の場となっていると思います。

ワークショップを通して伝えたいことは何ですか？

パフォーマーに同行してパフォーマンスを観ている学生の反応を毎日見ていると、いろいろな反応があるんです。無視する人もいれば、笑ったり、「へえ、おもしろい」と言っていたり。ほとんどの人は「これはなんだ？」っていうのが頭にあるんですよ。そして私に向かって「これ何かのパフォーマンスですか？」と聞いてくるんです。これは大事なことです。

例えばフレミングが1920年代にペトリ皿の中にばい菌の成長を防ぐものを偶然発見しました。これは何だろう？ と思って、それがペニシリンの発見になったわけです。なんでこんな現象が起こるのかっていうことを、まあいいや、と思ってしまったら、それはペニシリンを発見できない人なんです。でも好奇心があってイマジネーションを活かしてやることであれば、すごい発見があるんです。ですから、「これはなんだ？」っていうのはすごく大事なことでと思います。そしてそれに続くステップ、イマジネーションを活かすことを鍛えるのがワークショップなんです。ただ有名な先生の講義を聴いて、テストで先生の言うことをそのまま書いて100点をとってもダメなんです。全然面白くない。先生も面白くない。生徒も面白くない。それが教育だとは僕は思っていません。

先生の考える教育とはどんなものですか？

大学の先生が一番考えるべき課題というのは、めいめいの学生たちのイマジネーションや、持っているユニークな才能をどう活かせばいいかということです。自分の持つ知識だけを与えるのではなくて、インスピレーションも同時に与えることが非常に大事です。私は英語を教えますが、たかが十数時間の一学期の授業で英語をどれくらい教えられるだろうか。他の科目もそうだけど、できるわけがないんです。だから、それより「ああ、英語は面白い、やりたいな」と思わせる、そういう結果が出れば正真正銘の教育だと思う。

橋本 純香

創造力を養うために設立された世界文明センター。人文と芸術という異なる切り口で、学生の創造力と想像力を刺激していく事を目的とするセンターの設立は東京工業大学に新たな風を呼び込むきっかけとなるのではないでしょう。

戦後日本は目覚ましい発展を遂げ、工業大国、技術大国となり、先進国の一つとして数えられるまでになってきました。その反面、技術の発展に偏った考え方も同時に成長してきてしまったように思えます。しかし、そのような中でも数々の偉大な人々が生まれ、画期的な発見・発明をしてきました。彼らの根底にあるのは、本稿中でもパルバース先生が仰っている通り、日本、そして世界中の人々の生活の向上を図りたい、という想いではないかと思います。「誰か」のために何かをする、そのためには誰かについて知らなければならないでしょう。その第一歩としてこのセンターの名前通りに世界の文明を学んでみるのはいかがでしょう。

最後になりましたが、お忙しい中取材を快諾してくださり、更には度重なる原稿への校正をいただいたロジャー・パルバース先生にこの場を借りて心より御礼申し上げます。ありがとうございました。



人文学院担当
橋爪 大三郎 先生

過去から現代に至るまで、人類は様々な知を生み出してきた。その多くは先人の知にならない、時に覆しながら創られてきたものである。

人文学院では新たな知の創造をコンセプトに据え、実際に創造の現場にいる方による講義や研究会の傍聴により、知の創造の現場を体感させることを目的とした授業の展開を行っており、学生が将来自分の専門分野で最先端の研究を行うための創造力を養っている。

副センター長を務め人文学院を担当されている橋爪大三郎先生に、人文系における創造について語っていただいた。

発想はいつも古典から

人文系はどのようにして研究するのですか？

人文学はものを扱わないから、理工系のような実験はしないんだ。その代わりに「古典」を読むんです。古典というのは、100年も1000年も、いくつもの時代を通して読まれ続けて、みんながそこから情報を受け取って議論してきたもので、ものごとの考え方や発想の骨格となってきた思想のことなんです。

古典というものは、どの時代にも通用するような思想のことですか？

その時代だけに合った思想というのも古典になると思う。たとえばマルクス主義というの、あるときものすごい影響力があったけど今はあまり人気がなくなっちゃった。マルクス主義がどういうことを説いたかという、世の中には階級闘争というものがあるって、資本家と労働者がいて、資本家が労働者を搾取している。それはとんでもないことだと。このようなことが起きるのは私有財産制度などというものがあるからであり、これを無くして共産主義社会にすればみんな幸せになるといったんだ。これが古典かどうかというと、古典だと思う。今その思想が適用できなくなったからといって、その思想が無価値かといえば、そうではない。今は正しくないといわれているけど、マルクス主義が出てくる前までの思想にくらべると、はるかに画期的で新しく正しい意見なんだ。そこに注目すると、古典と言える。つまり、あるアイデアを一番最初に述べた、それが古典である資格だと思う。社会科学や人文科学も

一緒に、誰かが最初にある素晴らしいアイデアを思いついて、みんなにいいたいから本を書くわけだ。アイデアを考えるときってというのは、今まで誰かが考えたんじゃないかとか、使えるものはないかっていろいろ探してみる。そうすると不思議なことに他の古典が自然に目に入ってくる。たとえばマルクスはリカルドを読んだ。アダム＝スミスを読んだ。そのほかにも様々な本を読んだ。そういうものに大きな影響を受けるわけ。使えるものは全部使う。それでも自分のいいたいことはまだいえないとき、そこで初めて自分の新しいアイデアを付け加えて、新しい思想が出来る。新しい思想を生み出すということは、それ以前にあったいくつもの古典と密接な関係を築いていくということなんだ。それが古典と古典の間の関係なんだ。新しい思想というのはみんなそうやってできてるんです。新しいことをやりたいと思っている学生は多いと思うけど、そのやり方はどの分野でもどの時代でも実は同じものなんだということを体得するのも、人文学院において古典というものを読むひとつの目的なんだ。



最先端で一番手の仕事を

学生達は古典を読んでものを考えるというプロセスを
実践してると思いますか？

理工系の若い人は、とにかく超スピードで最先端まで行くことが求められるんです。何歳でその分野の最先端にたどりつくのか、おそらく24、25くらいじゃないかな。最短コースをまっしぐらに進んでいくことになるんです。そうするとその最中には古典に目を向けている余裕がないと思います。

人文系も似たもので、やっぱり専門分化していく。そして非常に細かいことをやるわけですよ。しばらくやってると、あんまり狭くて細かいところをやるので、自分は一体何をやっているんだろうと思うんですね。そこでちょっと落ち着いて周りを見わたしてみる。自分の研究の意味を探ろうと思うと、隣の研究室で何をやってるのかとか、ちょっと離れた分野で何やってるのかとか、そういうことに興味を持ち始める。そして段々、この学問がどうしてこういう方向にたどり着いたんだろうとか、この先どのように発展していくんだろうかということに興味が出てきて、40歳にもなれば、孤立無援だと思っていた自分の研究が、様々なこととつながっていたんだということが段々と見えてくる。その間研究テーマも数年おきに変わっていくつかやるわけだから、ますますそういうことを考える。そうすると思想のつながりなども意識し始めるから、古典を読む。そして、そのつながりから新しい思想を生み出すということが自然と身についてくる。最先端に出るまでは人のあとをついていけばいい。でも、その先で、本質的な大きな仕事をしようと思うと、かつて古典を生み出した人たちと同様に孤独と緊張感に見舞われることになるはずだ。そこを何とか自力で突破しなければいけない。そのときに、創造の苦しみというのは誰にとっても同じだということを知っていれば、先頭に立って道を切り開いていけると思う。

周りを見ず自分のことだけをやるような人は成功しないということですか？

私自身はそういう人をあまり知らないけど、もちろん成功することはある。どんなに狭く見える世界の中にも、突き抜けて極めていけば、共通の宇宙がある。そこに行き着くということは、ある程度その道を極めたということだ。ある境地に達すると、他の専門も、他の領域も、みんなこうなんじゃないかって想像力が働くようになる。結局は周りのことが見えてくるんだ。そうすると、他の専門家に対するリスペクトや謙虚さ、ひいては自信も生まれてくる。一番手になることと二番手に甘んじることはやっぱり違う。自分のやっていることに対して固定観念の中でしか向き合っていけない人はやっぱり二番手になるだろうね。

どうすれば一番手になれるかというアドバイスはありますか？

知識に頼らないで自分で考えてみたらいいんじゃない？例えば数学の問題を解くときに、ページめくればどんな例題にも答えが書いてあるんだよ。どこかの誰かが考えた一番確実なやり方が書いてあるわけだけど、その答えを見ないで、3分間でも5分間でもいいから自分で考えてみる。それが例題の解答と一緒にあったらそれは標準的だし、素晴らしい。場合によったら、別な解答になるかもしれない。これもすごいことだ。そうやって創造の現場を自分の中に作って、答えに行き着く着想の瞬間を楽しんでみたらどうかな。

数学だけに限らず、本を使ってもそれを作ることができる。ある程度基本的な本を沢山読むことが前提だけどね。まず読みたい本があったら買ってくる。でもすぐ読むわけじゃないから本棚に置いてあるとして、背表紙の題名を見てどんな本か想像するんだ。なるべく詳しく。私だったらこのタイトルで、どんな風にこの本を書くだろうって。で、あるときそれを読んでみる。もし自分の想像通りだったら、その本は読む必要ないんだな。知ってることの順列、組み合わせの中でできてる本だから。でも、自分の想像を裏切っている本が必ずあるわけだ。その人独自のアイデアがそこに隠れていて、自分が思い付かなかったことが書いてあるはず。そうすると本を読むのが格闘になる。私が勝つか、相手が勝つか。いきなり、さあお勉強しましょうって読み始めたら相手任せになってしまうんだ。そうではなくて、独立した知性なんだから独立した知性としてふるまわしてほしい。はじめはレベルが低いかもしれない。でも先生さえ良ければ、レベルはどこまでも上げていくことが出来るんだよ。習えばいいんだから。でも、いつか習い終わる。そこから先はまだ誰にもわからないという場所に出してしまう。そのときに必要なのは、人が言ったことを速やかに吸収する能力ではないよね。そんな能力はもうなんの役にも立たない。そうではなくて、孤立無援の場所で、どれだけ頑張ってクリエイティブなことができるかっていうことだ。

『アマデウス』という映画を知ってるかな。天才モーツァルトとその才能を妬むサリエリという音楽家が出てくるんだけど、サリエリは嫉妬のせいで、クリエイティブになりきれなかった人なんだ。一流の研究者を目指して走り出すと、大部分の人はそういう感情に負けてサリエリになってしまう可能性がある。そうすると純粋に学問に打ち込めなくなってしまうんだ。クリエイティブになりきれないという苦勞を味わったとき、それを耐え忍ばなければ更なる高みへは登れないだろうね。

知の探究の場、研究会

研究会ではどのようなことを提供するのですか？

人文系では、本を読む。それから討論する。なぜ本を読むかというと、書いた人と直接討論することは難しいからだ。それを書いた人が死んでいたら尚更だ。今まで生まれた偉大な知性は、ほぼ全員死んじゃってる。例えばソクラテスとの討論は、ソクラテスの書いたものを読む以外に方法はない。対話の唯一の方法は本を読むことなんだ。つまり本を読むのは目的じゃなくて手段なんだよ。目的は対話、そこから触発されて自分が良い考えを考え出すことだ。

そうやってある考えが出てきたらそれが良いか悪いかを、今度は研究会で討論して確かめる。悪い考えは言い負かされて、良い考えは生き残るというルールでやるのが研究会。これにより知識が生産される。単独だとだめなアイデアでも話し合ってみると、化学反応みたいなことが起こって誰も思わなかったアイデアになる。それこそ討論の醍醐味なんだね。そういう知識の創造の現場を見てもらうというのが研究会の意義の一つだ。知識がそうやって生まれていることをわかってもらうためには、教室で教師から出来上がった知識を順番に聞くより、知識が生み出される現場を見てもらう方が実感しやすい。でも討論会とかシンポジウムと違って研究会っていうのは普通は公開しない。だけど初心者や中級者の人々を刺激してもっと深い知識を持ってもらおうというのも、教育としては重要だから、オブザーバーというかたちでそこにいてもらう、またはアウトプットを公開すると。そういうやり方を考えています。

実験室に閉じこもって、拘束時間が長くて他の事考えている暇もない。時間は限られているけどそれでも結果を出さなきゃいけないとしたら、やっぱり質が求められる。どの本をどういう風に読めば効率がよいかというようなノウハウを見つけて、良い素材に接すれば、限られた時間や資源の投下で最高の刺激が得られる。東工大にあるべき人文学院、芸術学院は、そういうチャンスを提供するものだと思うんです。

最後に学生へのメッセージをお願いします

学生諸君はみんな忙しくて最適に行動してると思うから、無理にこれもしなさいとかは言えない。なにが一番必要かは本人が一番わかっていると思うんです。ちょっと面白そうかなあとか、世界文明センターの今日の催しに行こうかどうしようかなあとか迷ったら、まず行きなさい！それは縁があったってことだから。

橋本 純香

温故知新の言葉が表す通り、人が新たな知を生み出すためには過去を礎にしてきた。これからそれぞれの専門に入っていく自分たちに必要なものは過去を知り、そして得た知識を解釈し討論することだと感じました。学生にとってそう遠くない先に研究者としての道がある。それならば人文学院を通じ、少しでも早く新たな知の創造の現場を見てみたいと思います。今回の取材に御協力頂いた橋爪先生に厚く御礼申し上げます。